



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1997 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

仕事は人間のため

〈人間が仕事のためにあるのではない〉

（働く人の守護聖人聖ヨセフの祝日である）今日の典礼は、マリアとイエズスのそばで過ごした聖ヨセフの経験と黙想するよう、私たちに呼びかけています。

教会は、ヨセフを信者の模範と賛えます。神の御旨に全面的に従った信心篤い人、清く崇高な愛で妻マリアに接し、神の神秘的な計画に沿って少年イエズスを教えた人がヨセフです。

聖伝はヨセフが労働者であったと伝えていきます。「あれは大工の子ではないか。」（マテオ13・55）ナザレトの住人たちは、イエズスの行なった不思議なわざを見て驚きました。人々

（働く人の守護聖人聖ヨセフの祝日である）今日も村の大工であり、神の御前に兄弟姉妹に仕えることで自己を表わしつつ、仕事の中に存在を示す人だったからです。キリスト教共同体もまた、聖ヨセフの生涯を広く複雑な仕事の世界に生きる全ての人の模範と考えています。こうした理由で教会は働く人を天国の聖ヨセフの保護に委ね、ヨセフを労働者の保護の聖人と宣言するのです。

人間を生産の手段に

おとしめてはならない

教会は仕事の世界に目を向け、イエズスとヨセフの存在によって聖化されたナザレトの大工の仕事場を黙想します。人間生活の基本的次元である仕事にまつわる問いや問題、恐れや希望を視野に置きつつ、人間の尊厳を高めたいと考えています。「働く人の尊厳と権利への注意を促し、そのような尊厳と権利が侵害されている諸状況は断罪し、人間と社会にとつての真の進歩を確保する方向に先述の変化を導くことで協力することはいつも教会の役割だと考えています。」（回勅「働くことについて」1番）

レトの大工の仕事場を黙想します。人間生活の基本的次元である仕事にまつわる問いや問題、恐れや希望を視野に置きつつ、人間の尊厳を高めたいと考えています。「働く人の尊厳と権利への注意を促し、そのような尊厳と権利が侵害されている諸状況は断罪し、人間と社会にとつての真の進歩を確保する方向に先述の変化を導くことで協力することはいつも教会の役割だと考えています。」（回勅「働くことについて」1番）

私たちの現代文化と経済に現われているいくつもの危険な兆候を前に、教会は神の似姿である人間の偉大さと創造における重要な地位とを宣言してやみません。教会はこの使命をまず、「それ自体、福音宣教の有効な手段となつて行ないます。社会教説は「神を宣言し、キリストにおけるあらゆる人間に対する

神の救いの神秘を宣言し、まさにそれゆえに人間に人間自身を示すのです。このような観点から、またこのような観点から、教会の社会的教説は、あらゆることさらに関わります。すなわち、個人の人權です。」（回勅「新しい課題」54番）

人間を「製品」もしくは生産の手段におとしめようとすると、働く人の尊厳と権利を訴え、人間と社会にとつての真の進歩を目指す方向へ導くことは教会の役目です。社会教説を通じて教会は、「仕事の本質は人間である」「人間の労働は資本に優先する」ことを訴えます。人には働く権利があり、これこそが現代人の尊厳を保障するものですが、それは同時に社会全体の進歩に貢献するという義務でもあり、奉仕と連帯への召命でもあります。働く人の守護聖人、聖ヨセフの生涯と模範を黙想しましょう。

に対して、教会は「人間が仕事の主体」であり、従って神の計画においては「働くことは人間のためであつて、人間が仕事のためにいるのではない」（「働くことについて」6番）と思ひ起こさせています。

同じ理由で、教会は資本主義の主張に反対し、「資本に対する労働の優先という原理」を主

張します。ものを生産する過程において、人間の労働は「いつも第一の能動因で、生産手段の総体である資本は、単なる道具かあるいは道具的要因のまま残ります。」（同12番）

こうした原則は、人間活動におけるあらゆる形での疎外を厳しく退けます。今日無数の人々を苦しめている失業という深刻な問題を考えるとき、これらの原則は特に時宜になつたものです。働く権利こそが現代人の尊厳を保障することを明らかにしてくれるからです。ふさわしい仕事がないければ、人は個人的にも社会的にも十分な開花を逃げるための条件が満たされません。事実、失業は人を社会から置きざりにし、苦痛に満ちた屈辱的状况に陥らせています。

ですから、働く権利を「自分の行動を自由に決定する権利」と結び付けねばなりません。しかし、こうした権利を個人主義的な意味でとらえてはなりません。それらは他者への奉仕や協力という使命との関連で理解すべきものです。自由を正しく行使するには、他者の自由との関係や相互作用を考慮しなければなりません。それは自由の制約ではなく、個人の自由を發展させるための条件であり、社会全

体の進歩に寄与するという義務を果たすことであると理解するべきです。

このように、仕事はまず何よりも権利です。なぜなら仕事は人間の社会関係から生じる義務であり、奉仕と連帯という召命を表わしているからです。

日々の労苦は新たな生命の光

聖ヨセフの姿は、仕事の要があることを思い出させてくれます。聖人の生涯は、神に聞き従うことやキリストとの親しさに特徴づけられ、信仰と生活、個人としての完成と兄弟姉妹への愛、日々の義務と未来への確信の調和に満ちた統合であったと思われまします。

ヨセフの証しは働く人に訴えかけます。第一の方である神と、キリストの十字架と贖いから発する光を受け入れることによってのみ、人間にふさわしい労働条件を満たし、日々の労苦の中に「新しいのち、新しい善いものの幾分か光を」「新しい天と新しい地」の告知でもあるかのように見出し出します。そこへと、人間と世界はまさに働くことに伴う労苦を通して参加するのです。「働くことについて」27番

(九七・三・十九)

高齢者は

教会の大切な一員

〔教会シリーズ 最終回〕

1 生産性を尊ぶ今日のような社会では、高齢者は非

生産的と見なされて、他の人のお荷物扱いされる危険があります。寿命の伸びたこと自体が、介護を必要とする老人、さらには愛情や配慮をもって孤独を慰めてくれる存在を必要とする老人の数を増やしています。現在、教会はこの問題に心を留め、せめて手伝いだけでも、人も手段も不足して困難ではあります。これまで以上に問題解決の方法を探っています。教会は絶えず修道会や信徒のボランティアグループによる活動を通じてお年寄りの支援を進め、若者や大人たち皆に、かつて自分たちを寛大に世話してくれた身近な人々を顧みるよう訴えています。

2

教会は特別な喜びをもって、高齢者もまたキリスト教共同体の中で居場所と役割を持つて、活動をもつて共同体の発展

に力を尽くす使命があります。

多くの人が、「第三世代」と呼ばれる年代になってから神に近づくこと、まさにその年になつてから観想と秘跡の生活を通じた靈魂の若返りへと導かれ得ることを教会はよく知っています。年と共に積み重ねてきた経験は、この世の事物に終わりがあつたことを教え、人生には神の存在が必要であることを痛感させます。幾度か味わつた挫折は、神に信頼すべきことを教えました。高齢者が身につけた知恵は、周囲の人々のみならずキリスト教共同体全体の宝です。

3

さて、聖書を見ると、高齢者は知恵と分別と忠告の人として描かれています。(シラの書25・4・6)だからこそ、聖書の著者は老人のものを足しげく訪れるよう勧めているのです。「老人の集まりにせつせと足を運び、一人の知恵者がいたらその人に近づけ。」(シラの書6・34)教会も繰り返して警告します。「年とつた人を辱めるな。私たちが年寄りに

なるのだ。」(8・6)「老人の話を侮るな。彼らは先祖から話を聞いています。」(8・9)教会は、老人の言葉に耳を傾けるよう若者に命じるイスラエルの伝統を賛美すべきものと考えています。「われらはこの耳で聞いた、先祖が語つたことを。そのころ、その昔のころ、あなたが行なわれた偉業を。」(詩篇44(43)・2)

福音も昔の掟の教えを告げています。「父母を敬え。」(脱出20・12、第二法5・16)キリストも、この掟をないがしろにするご都合主義な人々に対して注意を促しました。(マルコ7・9・13参照)昔から教会の教導職と司牧者たちは、常に両親を尊び、物質的にも援助するよう教え、要求もしています。

年老いた両親を敬い、助けよという勧めは今でもそのまま通用します。今日では以前にも増して、教会に不可欠な共同体の連帯感が新旧さまざまな方法で子としての愛のわざを履行し、この義務を果たしています。

4 キリスト教共同体である教会は、高齢者の資質や能力を認め、賛え、特定の時や条件に縛られず各人の状況に合ったいろいろな形で各自の使命を果たし続けるよう呼びかけています。ですから高齢者は、

「もはや帰らぬ過去を懐かしんで閉じこもつたり、移りゆく世にあつて出会ういろいろな困難のために責任から逃れようとする誘惑を断固退け」なければなりません。(「信徒の召命と使命」48番)

たとえ世の中の変化について行くのに精一杯の状態であつても、悲観的になつたり、近づく現実を理解することを厭うあまり自分から引きこもつてしまつてはなりません。キリストへの希望と信仰に支えられ、世を満たすキリストの恩寵のうちに成長しながら、しっかりと未来を見つめる努力が大切なのです。

5 このような信仰に照らされ、高齢者は自分たちの資質や豊かな靈性によつて教会を富ませなければならぬことをより良く理解することが出来ます。実に高齢者は、長い人生経験に裏打ちされた証し、この世の様々な事柄や状況に対する賢明な判断、人間同士の間で愛が不可欠であるというはつきりとした視点、全ての人とこの世の歴史を導く神の愛への心静かな信頼と言つたものを教えてくれます。すでに詩篇92(91)は、イスラエルの「正しい人」に約束しています。「彼らは年老いてなお実を結び、さわやかに生き生き

と

説教・講話・書簡等の抄訳

として、主は正しいものと告げらる。」(15-16)

さらに、現代社会を見ていてわかるのは、教会でのお年寄りの使命が新たな展開を見せていることです。(「信徒の召命と使命」48番参照) 今日、多くの高齢者が健康を保ち、また過去のどの時代よりもたやすく健康を回復することができません。従って教区や他の分野でも、役に立つ働きが可能です。

実際、高齢者の中には能力や個々の可能性を生かすことができるなら、大変有能な人がいます。年齢は妨げになりません。彼らも共同体の様々な必要、例えば礼拝、病人の訪問、貧しい人を助けるなどの仕事に従事することができのです。寄る年波でこうした活動を中断したり縮小せざるを得なくなっても、高齢者には教会に貢献する手段があります。折り、主への愛のために不快さをも受け入れることによってです。

最後に、私たちが心すべきこととがあります。年を取って健康上の問題を抱え、体力も弱まった時こそ受難と十字架においてキリストと結び付くのです。こうして贖いをもたらすいけにえの秘義をさらに深く洞察し、この秘義への信仰を証明することができます。老齢による様々な

困難や試練の中で、秘義への信仰から生まれた勇氣と希望を証明することができるのです。高齢者の生活の中で起こる全てのことは、その人の地上での使命を果たす上で役立ちます。何も無駄になりません。むしろ高齢者の協力は人目につかないゆえになおさら、教会にとって価値あるものなのです。(「信徒の召命と使命」48番参照)

6 老齢とは、個人と社会と教会にとって賜物である

困難や試練の中で、秘義への信仰から生まれた勇氣と希望を証明することができるのです。高齢者の生活の中で起こる全てのことは、その人の地上での使命を果たす上で役立ちます。何も無駄になりません。むしろ高齢者の協力は人目につかないゆえになおさら、教会にとって価値あるものなのです。(「信徒の召命と使命」48番参照)

り、感謝を捧げるべきであることをつけ加えておくべきでしょう。生命は、いつでもすばらしい賜物です。忠実にキリストに従う人にとって、高齢者に与えられる特別なカリスマについて話すことができるでしょう。自らの才能や体力を的確に用いて、自分の楽しみと他の人の益のために役立てるのです。

老齢に向かう全ての兄弟姉妹たちに、主が詩篇作者の願った聖霊の賜物をお与えくださいませよう。」「あなたの光と真理を送り、私を導き、あなたの聖なる山、あなたの幕屋の方に私を連れ行きたまえ。そのとき、私は神の祭壇に入ろう、私の歓喜、私の喜悅である神に。…私の魂よ、なぜ打ちしおれるのか。なぜ嘆くのか。神に希望をおけ、私は再び神を賛えるだろう。私の顔の救い、私の神を。」(詩篇43(42) 3-5)

聖書では、もとのヘブライ語の四節が神への祈願として訳されています。「私の若さに喜びをもたらしてくれるのは誰か?」老いた司祭である私たちも、長年の間、この詩篇の言葉を繰り返してミサの始まりを告げました。折りと憧れの中で、私たちの若さに喜びをもたらしてくれる神への祈願と賛美は、年をとっても変わることがなく、妨げられることはありません。(九四・九・七)

マリアはボランティア活動の原点

〈国際ボランティア団体のメンバーを迎えて〉

★ 皆さんの価値ある事業も今年で25周年目を迎え、今日こうして皆さんにお会いできたことを嬉しく思います。

(一) 皆さんは世界でボランティア活動を繰り広げることをご念願としておられます。そこで、ボランティア組織が公共の組織と協力して果たすべき、基本的な役割を思い起こさずにいられません。ボランティア活動に携わる人々は、自由な心で直接に兄弟姉妹たちに奉仕し、特に困難に遭う人、疎外された状況にある人たちを助けていま

す。その目的は、困難にある人々のそばで、真の自由と向上への道を歩む手助けをすることです。

★ 「世界でのボランティア活動」という言葉は、皆さんの役割を思い起こさせますが、まず何よりも皆さんを動かす靈感を表わしています。皆さんが「この世にあるボランティア」であり、自らの利益ではなく、仕えることを目的とするなら、それは間違いなく霊的な召し出しです。こうして皆さんの働きは、隣人への責任を引き受

け、愛の文化をこの世に広めるため力を尽くすことを示すしるしとなります。

に当たり必要となるのは、これからも皆さんが、何世紀にも渡り福音に支えられ、養われ、靈感を得て伝えられてきた価値を基礎としていることです。何と多くの人が福音という澄んだ井戸から水をくみ、まことの愛の証人・平和の使者・正義と連帯をもたらし者となるすべを身につけてきたことでしょうか!

先ほど皆さんの議長が、今後個人として、またグループとしての意志決定において、さらに一層イエズス・キリストご自身を中心に据え、福音に根ざした取り組みを深めたい、と表明されたことに感謝します。これは紀元二千年の大聖年を迎える準備としてふさわしい決定だと思えます。今年、一九九七年は、多様なメンバーを抱える全教会が、救い主でありこの世と人類の唯一の解放者であるキリストをしっかりと見つめるべき時です。

★ 思い返せばこの25年間、皆さんの中には疑問の余地のない連帯とすばらしい寛大さをもって働く人々がおられました。まことの証人、人間とキリストへの忠実を証した人々です。その模範が皆さんを駆り立て、勇気づけるものとなりませう。同じ道をたどる皆さんの傍らにあつて、教会は皆さんを励ましています。

効果的に守ることを目指し、世界でボランティア活動を行なう

人々の解放と、人間の尊厳を

説教・講話・書簡等の抄訳

がっかりしてはなりません。たとえ困難があまりに大きく、克服できないと思える時であっても。無力を感じるその時こそ何でもおできになる(ルカ1・37、マテオ19・26参照)神への信仰に支えられなければなりません。特に若い世代のボランティアたちにとって皆さんの証しは大切です。彼らは少しづつ根気よく形成の努力を重ねると共に、最初の情熱を保つことも学ばねばならないからです。

★ ボランティアの皆さん、あなた方の静かで積極的な活動は、困難にある人々を助け、常に全ての人のそばを歩まれるキリストの存在を生き生きと宣言しています。

友である皆さん一人ひとりと皆さんの同僚の方々を、聖マリアのご保護に委ねます。天使のお告げを承諾した後、すぐにとこエリザベトのため愛の奉仕を履行した(ルカ1・38、56参照)マリアの姿に、キリスト信者のボランティア活動の典型を見て取り、それに励まされて、世界中の兄弟姉妹たちと共に新たな活動の力とすることのできるでしょう。

皆さんのため、また世界中のボランティアたちのために心から祝福を送ります。

(九七・一一・二二)

公会議と聖母

聖母マリアと教会 シリーズ12

1 今日、教会の御母の特別な存在について、今世紀の教会で最も重要な出来事であった第二バチカン公会議の様子を通して考えましょう。この公会議は一九六二年十月十一日の朝、教皇ヨハネ二三世によって開会され、一九六五年十二月八日、教皇パウロ六世によって閉会されました。

この公会議の特徴は、最初からきわめてマリア的な色彩が強かったことです。尊敬する前任者・神のしもべヨハネ二三世はすでに、使徒書簡「公会議を開くにあたり」の中で、「恩寵の母・天の保護者」であるマリアの強力な仲介を願うよう勧めてきました。(AAS 53 [1961] 242)

教会憲章におけるマリア

一九六二年のマリアのお潔めの祝日に、教皇ヨハネ二三世は会議の開始を十月十一日と決定しました。エフエゾ公会議を思い起こしてこの日が選ばれたのですが、この日にエフエゾ公会

議はマリアを神の母「テオトコス」であると宣言したのです。

(自発教令「公会議」AAS 54 [1962] 67-68) 教皇は開会の挨拶の中で、会議が成功するように聖母マリアに母の助けをこい願ひ、「キリスト信者の助け、司教の助け」に公会議を託しました。(AAS 54 [1962] 795)

会議の教父たちも、会期の初めに全世界に向けたメッセージの中で「使徒の後継者である私たちは、イエズスの母マリアと折りのうちに結ばれて、一つの使徒的共同体を形づくっています」(公会議録 I, 254)と述べ、マリアへの思いを表わしました。このようにマリアとの一致のうちに、自らを聖霊を待つ初代教会と結びつけたのでした。

(使徒行録 I, 14 参照)

2 公会議の第二会期で、聖母マリアに関することは

教会憲章の中に置くのが良いのではないかという案が出されました。神学委員会はこの提案を支持しましたが、様々な意見が

まき起こりました。

教会におけるイエズスの母の特別な使命を強調するには、この提案では不十分であると考えた人たちは、マリアの尊厳、優越性、抜きん出た聖性、御子の贖いにおける独自の役割を示すためには独立した一書を立てる以外ないと主張しました。そして、ある意味で教会の上位におられると言えるマリアに関する教えを、教会に關することと同じ文書に入れれば、マリアの優越性を十分に強調できなくなり、マリアの役割を教会の他のメンバーと同等のレベルにまで引き下げてしまおうのではないかと心配しました。(公会議録 II, III, 338-342)

しかし他の教父たちは、マリアに関する教えと教会に關する教えを一つの文書にいれるという、神学委員会が推奨する案に賛成でした。それによると、神の民のアイデンティティと使命を再発見するために、処女性と母性において教会の形象であり模範であるマリアと密接に結び

合していることを示さなければならぬ、と考えるこの公会議では、教会とマリアは切り離せないということでした。事実、教会の傑出したメンバーとして、聖母は教会の教義に特別な位置を占めています。さらに、マリ

アと教会との結びつきを強調することによって、プロテスタントのキリスト信者は公会議が示すマリアについての教えをより良く理解できると考えたのです。(公会議録 II, III, 343-345) 公会議の教父たちはマリアへの愛に動かされて、様々な教義上の立場から、マリアという人の色々な面を重視しました。ある教父たちはまずキリストとの関係からマリアを考えようとしたし、ある教父たちは教会のメンバーとしての角度から考えようとした。

3 教会生命における特別な存在であることと、神の母としての尊厳を考慮した上で、教義について綿密に検討した結果、マリアについては教会に關する公会議文書の中で扱うことになりました。(公会議録 II, III, 627)

教会憲章の中に起草された、祝された処女についての新しい概要を見れば、教理が大幅に進歩していることがわかります。マリアの信仰を強調し、聖書を土台にしてマリア論を体系的に示したことは、神の母に寄せるキリスト信者の敬愛と尊敬をいや増す決め手となりました。

やがて、教父たちが心配したような格下げの恐れのないことがわかりました。マリアの使命

と優越性が十二分に再確認され、神の救いの計画への協力が強調されました。マリアの協力はキリストの比類ない仲介とてまく調和していたことがさらに明白に示されました。

まず最初に、公会議の教導権は、キリストの贖いのみわざと教会生命におけるマリアの役割について教理上の詳しい説明を行ないました。

公会議の教父たちの選択は真に時機を得たものであったと言えましょう。これが後の教理に関する仕事にとりも豊かな実りをもたらすこととなります。

4

会議の開期中、多くの教父が、救いの働きにおけるマリアの役割について述べ、マリアに関する教えをさらに豊かにすることを望みました。しかし、第二バチカン公会議ではマリアに関する討議が特別な状況で行なわれたため、この望みは広範囲に渡る強いものであったにも関わらず、受け入れられませんでした。公会議全体として、マリアに関する討議は活発でバランスの取れたものでした。完璧な定義づけは行なわれませんでした。主題そのものにはどれも重大な注目が集まりました。

教えをバランスよく提示する

仲介者という称号を用いることをためらう教父もいましたが、公会議はこの称号を一度使いましたし、恩寵を受けて母になるという天使のメッセージに同意したマリアの仲介的な役割を、別の言い方で述べることを妨げませんでした。(公会憲章62番参照)最後に公会議は、人々の超自然的生命を回復させるために、マリアは「全く独自の方法で」協力したと説明しました。(同61番参照)結局、「神の母」という呼び名を使うことはなかったとしても、教会憲章は、マリアが最も愛すべき母として教会の崇敬を受けていることを、明らかに強調しています。

「教会憲章」第8章の記述全体が、特定の用語は使っていませんが、基本の教えの豊かで確実な説明であり、教会が母とも模範とも仰ぐマリアへの信仰と愛を表わしています。

公会議での討論中、さまざまな観点から意見が出されたのはとても良いことでした。それらの間の調和の取れた関係を基礎として、主の御母の並みはずれた役割を、さらに完全に均整のとれた姿でキリスト信者の信仰と奉献の前に提示したのです。

(九五・十一・十三)

信仰の一致に 奉仕するために

「教皇首位権」をめぐるシンポジウムに寄せた
教皇さまのメッセージ

(昨年十二月、教理省は「ペトロの後継者の首位権」をテーマにしたシンポジウムを開催し、神学の各分野の専門家たちが参加した。また、カトリック以外のキリスト教諸派の代表者たちも出席した。)

(…)今回のシンポジウム開催に当たって、心よりお礼申し上げます。多くの著名な学者と専門家の出席を得られたことも感謝の至りです。参加された方々に、私からの深い感謝の念をお伝えください。

回勅「キリスト者の一致」で述べたように、「注目してよいこと、大きな希望を抱かせるものがあります。ローマの司教の首位の座という問題が、現に検討されたり、検討される予定になっただけです。まさに注目に値し、大きな希望を抱かせるものですが、この問題は、カトリック教会がその他の諸教会や教会的諸共同体と行なっている神学的な対話の中だけでなく、さらに広くエキュメニズム運動全体の中でも、いわば最重要課

題となっています。」(89番)

カトリック教会は使徒継承への忠実と教父たちへの信仰によって、神が「一致の、永久の見える源泉」(教会憲章23番)とされたペトロの後継者の役割を保つてきました。神の憐れみのわざに端を発するこれら一致のための奉仕は、同じ司教団の中でローマ司教として使徒ペトロの後を継ぐ者に委ねられた賜物です。この役割に伴う同じ力と権限(それがなければこの役目は実体を失ってしまいます)は、全てをキリスト・イエズスのもとに「一つ」にしようとお望みの、憐れみ深い神のご計画に奉仕するためであることを常に理解していなければなりません。この役割において、首位権の行使は様々な形の奉仕として表われます。信仰の一致に努める、秘跡や典礼の執行を見守る、福音宣教、教えとキリスト教的な生活など、これら全ては常に交わりの中に行なわなければならないことを自覚しつつ。

仕は福音宣教の一つの形であり手段であることを強調しなければなりません。新たな福音宣教の行く末は、教会が一致の証人であり、ペトロの後継者がその一致の保証でありしるしであることに関わっているからです。

とは言え、一九八四年六月のジュネーブでの世界教会会議で述べたことですが、カトリック教会のこのような確信は「(カトリック以外のキリスト教諸派の)皆さんの多くの方には受け入れ難いでしょう。悲しむべき記憶がいくつあるからです。」(Insegnamenti, VII, II[1984], 1686)

首位権の不可欠の役割である一致のために、私は回勅「キリスト者の一致」で自らの確信を述べました。「私には特別の義務があることを確信しています。非常に多くのキリスト教共同体がエキュメニズムの成就を熱く望んでいることは、よく分かっています。首位の権限の本質は何も損なわないで、しかもなお、新しい状況に対応できる何らかの形式を見いだして欲しいという要望も、私のもとに寄せられています。」(95番)

この要請は、交わりとして理解されている教会のいくつかの局面について述べた教理省の書簡コンムニオス・ノツイオにも表明されています。「ペトロの

不変の教え

首位権がその後継者であるローマ司教に引き継がれていること、ペトロの役務が主の意図された方法で、世界に広がる使徒の奉仕として果たされていることは万人が認めることができる。ペトロの役務はどの教会にも内側から存在し、教会という存在を神的な組織として保ち、時と場所と状況に応じて様々な表われ方をするのは、歴史が示すとおりである。」(18番)

今回のシンポジウムには、聖

子供たち、先生方とご両親の皆さん、愛を込めてご挨拶申し上げます。(…)

この機会に、家庭から始まる教育計画の大切さを強調したいと思えます。(…)

若者たちが小教区の若い人のためのプログラムに参加するなら、わざわざカトリックの学校へ行く必要があるのか、と言う人もあるでしょう。(その逆を言う人もあります。)

私の答えはこうです。教区共同体は宗教教育と霊性教育の場です。学校は文化教育の場です。この二つを統合させねばなりません。同じ価値から生命を吹き込まれているからです。それは、相対主義に支配され、存在の空しさに怯える社会に

書、歴史、組織神学など神学の各分野の学者や専門家が加わって、神学知識の各分野で行なわれた研究の正確と徹底を証明しています。研究会のために定められた教理的形式に従って、神学的対話を深めるための重要な貢献となるよう、教会論のこの分野に関するカトリック信仰の教えの必須要素を示し、議論しても差し支えないか、少なくとも良心を拘束する最終的なものではない問題を区別します。こ

あつて、子供たちに福音の変わらぬ価値に基づいた教育を与えようとするキリスト者の家庭の価値です。

今日、家庭・小教区・学校の協力が以前にも増して必要となつています。それは青少年の自由を制限することではなく、

学校と福音

自由を形づくり、責任ある、しっかりと動機づけられた選択ができるようにするためです。カトリック学校は、質の高い教育を施すと同時に、子供たちにキリスト教的価値を掲げ、それに基づいた生き方をするよう招きます。こうした価値を受け入

のような特殊性な性格は教会一致の対話を困難にするものではなく、対話に必要な条件であり、神的真理を認識する手段です。

私は深い関心をもって皆さんの成果を見守っています。シンポジウムの参加者と協力者の方全員に研究の成功を祈りつつ、皆さんの公平で真剣な真理への探求に心から感謝いたします。

特別な使徒の祝福を送ります。バチカンにて、九六年十一月三〇日。(署名)

れ、忠実に生きることを知る人にとつて、その教えが個人や家庭、職業上のレベルで大変積極的な成果を生むことは、経験に裏付けられた事実です。

少年少女の皆さん、家で、また学校や小教区でいろいろ学んだことを大切にしてください。皆さんの信じるその価値をどうすれば他の人に伝えられるかを学び、人生のどんな時でも愛と真理の証人となる務めがあると感じてもらえることを願います。どうぞ皆さん、楽しい日曜日！私からの祝福を学校と先生たち、カトリック学校の兄弟たち、ご両親と若者たち、子供たちに送ります。暖かい歓迎をありがとうございます。(九七・二・二三、ローマ市内のカトリック系の小学校を訪問されて。)

兄弟姉妹の皆さん。先日避暑地から戻り、またこうして皆さんと公に、親しくお会いできることを嬉しく思います。ペトロの座とゆかりの深いこの古い町の市民の皆さん、(…)また巡礼者の皆さん、心からご挨拶申し上げます。

休日は聖書に親しもう

多くの人は聖書を手に取るうにも妨げられることが多いでしょう。休日を活用して聖書をひもとき、その不滅のページに心を潜めてはどうでしょうか。

聖書の読み方を学ぶことは、信者にとっては基本です。それははしごの一段目であり、黙想とまことの祈りに伴われつつ進みます。聖書を読むことに基づいた祈りは、キリスト者の霊性の王道です。聖書のために必要な時間を捧げる人は、大いなる成果を得ることができます。

大聖年の準備の年である今年、私たちは「キリストが本当はどのような方であるのかを認識するために」「心を新たにして聖書に返る」よう招かれています。(使徒的書簡「紀元二千年の到来」40番) 全てのキリスト信者と真理を捜し求める全ての人が「聖書の巡礼」となって日々生命の言葉に養われつつ歩むことを学べるよう、祈りましょう。この意向を至聖なるマリア、神のみことばを受け入れ救い主の母となられた方に委ねます。(九七・七・二〇、カステル・ガンドルフオでのお告げの祈りの時間に。)

「教皇様の声」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月十日発行。定価 送料とも一部百八六円。定期購読は送料とも二、〇八七円(一月十二月号)。詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393